

『岩木山を科学する』・『岩木山を科学する2』

牧田 肇

津軽に住む人びとの心象風景の中心、生活の場、レクリエーションの場である岩木山について、弘前大学の教員をはじめ、青森県教育・研究機関などの関係者がこれまでの研究成果を持ち寄って、この二冊を著した。

自然・人文・社会科学にかかわる三九編の論文がある。

全てを紹介しては紙面を使いすぎるので、同じ研究範囲の論文をまとめ、紹介する。順番は両書とは少し変えて自然関係からとする。各論文はカギ括弧で示す。副題は省略した。丸括弧内の著者名のあとの数字は1が正編、2は第二巻に掲載されていることを示す。著者が多いときは、筆頭著者だけを記した。

岩木山の地学的側面をのべたのは、「岩石から見た岩木山（佐々木実・2）」・「岩木火山の地形と歴史（小岩直人・1）」・「岩木山の地震活動（小菅正裕・2）」・「岩木山の温泉（柴 正敏・1）」・「岩木山の気象（力石國男・1）」である。

岩木山は約三五万〜二〇万年前の火山活動によって、現在の山体があらかた作られ、その後、三万年前以降の火山活動で、現在の山頂や鳥海山などの頂（ドームと呼ばれる）ができた。人びとに強い印象をあたえる円錐形の由来が、噴火の時期を追ってくわしくのべられる。

日本の円錐火山の中では岩木山は、噴火活動の初期的な時期にあるの

だそうである。

地震に関しては、一九七〇年から年代を追って、岩木山周辺で起った地震の種類、発生した場所、深さ、規模が詳しくのべられている。これらの地震のある物はマグマの活動と関連して起こり、岩木山が「活火山」であることを示している。

岩木山周辺の温泉は、南麓から西南麓に集中している。これらの温泉の源泉の起源は、温泉水の分析から現在の鳥の海噴火口の地下にあるらしい。

岩木山の気温・積雪などについて、八合目のバスターミナル付近にある観測点で得られた観測値と弘前の観測値を比較することによってくわしくのべられている。岩木山周辺に浮かぶ雲、雪形について、岩木山が弘前にあたえる気象上の恩恵についてものべられる。

「岩木山の土砂災害・雪崩と地形条件（檜垣大助・1）」の前半は、一九七五年八月五〜七日の豪雨によって起こった「百沢土石流」について既存の報告書等の記述をもとにのべる。後半では、岩木山の森林限界より上でしばしば起こる大規模な雪崩と、雪崩の結果できた裸地について、現地調査の結果を基に、原因と土石流との関係などについてのべる。「岩木山の周辺から発見された化石（島口 天・2）」は、弘前市（旧岩木町）の中村川で発見され、のちにイワキサクシラと名付けられた鯨の化石の話である。発見と発掘、さらに展示にいたるまでのいきさつが興味深い。

岩木山の植物については、「岩木山の植生を理解する（石川幸男・2）」、「岩木山のコケ植物（太田正文・2）」がある。

まず、山麓から山頂部にいたるまでの植生が、種構成・生育環境について、日本全体の植生分布も視野に入れてのべられる。ついでコケ植物については、各所に見られるコケ植物を写真を添えて紹介している。嶽で見られるフソウツキヌキゴケの発見、再発見、同定の話は大変面白い。

「大型のキノコ類とは異なり、いわゆる『カビ』と呼ばれる」菌類を微小菌類という。「岩木山周辺の微小菌類について（田中和明・原田幸雄・2）」によると、このグループは、世界的にもまだ研究が進んでいない。筆者の一人原田はこの方面のスペシャリストとして、永年弘前大学で研究を行ってきた。そのため、弘前大学の菌類の標本庫は世界中の植物・菌類のデータベースに登録されるほどに整備されている。本書では、ここに集められた標本の中から、岩木山に関連する微小菌類が説明されている。

「岩木山の哺乳類（小原良孝・1）」、「岩木山の鳥類（小山信行・2）」、「岩木山の昆虫（阿部 東・市田忠夫・1）」、「岩木山の魚類（佐原雄二・1）」、「岩木山の淡水棲プラナリア（石田幸子・2）」では、トガリネズミ・ヤマネ、といった小型の哺乳類から、昆虫、鳥、魚、プラナリアにいたるまでの動物に関する研究が紹介される。プラナリア（ウズムシ）というのは、ちょっと見ヒルに似て、長さも3センチあるかなにかの、目立たない水生動物である。

いろいろな動物について生息環境や生態が簡潔にのべられている。通読して印象づけられるのは、人の生活の動物たちに対する影響、ことに人の生産活動の変化が動物群集にあたえる影響が大きいことである。目立たない生物であるプラナリアに関しても、岩木山神社のなかの流れに

ニジマスが放流され、参拝者がコインを投げ込んだために水質の変化が起こり、ある種類の個体数が激減したという例があげられている。

「岩木山の希少な生きものたち（齋藤信夫ほか・2）」と「お山を登る人里植物や外来植物（齋藤信夫・2）」は、岩木山に生育・生息するめずらしい植物・哺乳類・鳥類・昆虫と、その反対に、自然にはもともとなく、人によつてもたらされた植物の話である。植物ではキキョウ・オキナグサ、鳥類ではウズラ・ヨタカ・オオジシギなど、開発や土地利用の変化によつて、「希少」になってしまった生物についての記述は心がいたむ。ことに鳥に関しては、前にのべた鳥類の章と合わせて読まれることをお勧めする。

「岩木川の魚道と魚たちの泳ぎ（泉 完・1）」は、岩木川の堰の魚道の、季節別、時間別の通過魚種と数、魚の泳ぐ速度の研究だが、研究の方法から結果までの記述が大変面白い。

「考古学から見た岩木山（関根達人・1）」、「岩木山麓の古代製鉄遺跡群（岡田康博・2）」は考古学の成果である。旧石器時代から鎌倉・室町時代までの青森県の遺跡と出土品を通して、環境と人びとの生活を大変わかりやすくのべ、その中に岩木山とその周辺がうまくはめ込まれている。岩木山北東麓には製鉄関連遺跡が多数ある。これらの遺跡が約一〇〇〇年前、蝦夷えみしによつて作られたものであることは確実らしい。しかし、ここに大規模な製鉄遺跡がある理由、原料の採取場所や製品の供給先などは、まだ推測の域を出ないらしい。これらの推測をのべた部分が大変興味深い。

「津軽領国くにえす絵図に見る岩木山の表現とその変遷（本田 伸・2）」で

は、徳川幕府の命令によって正保・元禄・天保年間に作成された津軽領の国絵図の、制作過程や図による表現のちがいがくわしくのべられる。

「天気不正 — 岩木山神社・百沢寺と丹後日和（長谷川成一・小田桐睦弥・1）」、「下居宮と百沢寺（福井敏隆・2）」、「岩木山信仰とお山の硫黄山出火（小田桐睦弥・1）」

現在わたくしたちが親しんでいる岩木山神社は、もとは下居宮とよばれ、経営管理にあずかる寺（別当寺という）として百沢寺があった。この間の事情が、古代・中世、から明治時代にいたるまで、くわしくのべられている。

岩木山信仰が自然発生的なものではなく、百沢寺やその配下の寺による津軽一円の町や村へのお札配りによってひろがったという指摘には苦笑が湧く。お山参詣も、藩政時代と現在ではかなり異なっていたという記述は大変面白い。

高照神社は四代藩主津軽信政を祀った神社である。建立の背景、信政と吉川神道との関係、藩政に占める位置などがくわしくのべられている。「天気不正」は異常気象・天候不順のことで、津軽藩ではそれを山椒大夫伝説の加害者である丹後の者が領内に入ったためであるとして、丹後人の取り締まりを行なったという。

岩木山には、記録に残っている十六世紀後半から十九世紀後半まで三〇回あまりの噴火・水蒸気爆発の火山活動があるが、人的被害など大きな災害は起こさなかった。それが、岩木山を鎮守の山とする、津軽藩特有の信仰圏を確立する要因となったのではないかと指摘される。

「岩木山をめぐる寺々（篠村正雄・2）」では、藩政時代の津軽一円の仏教にまつわる諸事がのべられる。なかでも、寺が収入を得るために行なった開張と富くじの興行は面白い。

「弘前市岩木地区の人生儀礼と人びとの絆（長谷川方子・2）」は、岩木町を例に出生・結婚・葬儀の儀礼をくわしくのべた。

「岩木山麓の「入会」・「開拓」・「開発」について（武田共治・1）」、「岩木山麓の近現代史（中園 裕・1）」、「岩木山麓の戦後開拓のあゆみ（高瀬雅弘・2）」、「岩木山麓開発の歩み（宮本利行・2）」、「岩木山麓のレクリエーション施設とツーリズム施設について（谷口 建・1）」では、まず岩木山麓の自然の利用が藩政時代から現在まで、伝統的な「入会」という観点から語られる。戦前から戦後にかけて「開拓」の時代となり、高度成長期の「開発」を迎えるにつれて自然への負荷が、強くかつ非可逆的になっていった。その過程がいろいろの例をあげてのべられる。

個別的には、まず岩木村から、岩木町そして弘前市岩木地区にいたるまでの経緯が、農業的「開拓」から観光を主とする「開発」への移り変わりとしてとらえられる。ついで、鱈ヶ沢町山田野地区を中心に、戦後の食糧不足と、海外からの復員・引き揚げ者を受け入れるために行なわれた「緊急開拓事業」に入植した人びと、さらにその後加わった農家の二三男の人びとの生活も今日までたどられる。瑞穂開拓集落から始まって、岩木山麓の特産品となった「嶽きみ」の経緯は大変楽しい。観光開発の結果できた施設のこれまでの経緯と現状の具体例も示される。

嶽きみについては、「嶽きみ生産農家と地域ブランド（石塚哉史・

1)」が、品種・生産・流通・販売、生産農家の意識調査などをくわしくのべる。

「岩木山をめぐる林檎栽培の展開（山谷秀明・1）」では、岩木山が北西風をよけるのでリンゴの先枯れ病が起こりにくいために、東麓でリンゴの栽培がさかんであると指摘する。

「岩木川の水環境（工藤 明・1）」、「岩木川流域水田の土地改良と米づくり（鳴海勇蔵・2）」は岩木川が主題である。まず、「流域面積に対する耕地面積比率が国内主要河川中最大」である岩木川の水利の実態と問題点がのべられる。つづいて、津軽平野にひろがる農業用水路や溜池について、藩政時代の開田、農業用水路や溜池の整備、飢饉や洪水、ついで最近の圃場整備、農業機械の導入、さらには稲の品種改良にいたるまで、くわしくのべられる。

「岩木山麓山菜における生産・流通の現段階と課題（石塚哉史・2）」は、平川市にある「木村食品工業」を事例として、山菜の調達や、加工、流通について、役員への聞き取りをもとにしてまとめた。

両巻を通じて、著者らの研究対象に対する真摯な姿勢に感銘を受ける。行を追って問題の設定と論理的な解明を読んで行くと、知のよるこびを強く感じる。

ひとつ注文をつけるならば、個々の議論、ことに人文系の議論と自然系の議論が別々に語られていて有機性に乏しい。

著者各々に、専門についての執筆を依頼したから、これは避けられないことであつたと思う。しかし、山地はそこに生活する人びとを含めて、ひとつのまとまった生態系である。生態系を構成する各要素の有機

的につながりを論じる総合的、俯瞰的な章があればさらによかつただろう。

『岩木山を科学する』・B5判、二一九頁、二〇一四年一月刊、「岩木

山を科学する刊行会」編・北方新社刊、本体価格二〇〇〇円十税

『岩木山を科学する2』・B5判、二七六頁、二〇一五年二月刊、

「岩木山を科学する刊行会」編・北方新社刊、本体価格二三〇〇円十税

（またた・はじめ 白神マタギ舎）

― 彙 報 ―

◎弘前大学国史研究会第九一回例会は、左記の通り開催された。

福井敏隆氏「弘前藩の蝦夷地警備と青森妙見宮

（発見された大星神社の鯛口は何を語るか）

平成二十七年十二月十三日

（F）